

2013 年度研究プロジェクト報告

外国語教育研究センター「研究プロジェクト」は、諸言語および言語教育、またはこれらの言語が用いられる地域の社会・文化を対象とする共同研究および調査で、当センター専任所員を代表研究者として、学内外の研究者と共同で行うものです。期間は一年間で、その研究成果は翌年度の外国語教育研究センター紀要にて公表されます。

2012 年度に行われた研究プロジェクトは以下の 3 件です。

1. 関連性理論の研究—関連性理論を中心とした語用論全般の重要概念について—（代表研究員：岡田 聡宏）
2. バイリンガル教育を考える—日仏バイリンガルの発達と教育の現状—（代表研究員：堀内 ゆかり）
3. 明末清初における経世致用の学再考（代表研究員：馬淵 昌也）

* * *

関連性理論の研究

—関連性理論を中心とした語用論全般の重要概念について—

代表研究者：

岡田聡宏（学習院大学 外国語教育研究センター 教授）

研究メンバー

井門 亮（群馬大学 社会情報学部 情報行動学科 准教授）

松崎由貴（明治大学 政治経済学部 兼任講師）

研究の概略：

関連性理論とは、1980年代に Dan Sperber と Deirdre Wilson が提唱した理論である。関連性は、認知効果の大きさと認知効果を得るのに必要な処理コストという2つの要素のバランスの上に成立するものである。つまり、関連性における伝達行為とは、話し手の能力や話し手による伝達内容の選択という点を考慮に入れた上で、最も高い認知効果を持つ刺激を最も低い処理コストで伝達する行為を指す。このような考え方を基礎とする関連性理論は、認知科学の重要な一部を成すもので、コミュニケーション理論として最も注目されている理論の1つであると言える。

これまでのプロジェクトでは、アドホック概念の分析を中心に、この関連性理論について研究を進めてきた。2012年度については、Nicholas Allott の *Key Terms in Pragmatics* の分析を通して、関連性理論のみならず語用論全般の重要概念について詳しく考察し、研究会での議論を通して、草創期から現在に至るまでの語用論について知識を深めた。

研究の成果として、概念の転嫁的用法を含むアドホック概念構築という観点から省略語とイディオムについて考察を行い、本号掲載の論文「省略語・イディオム解釈とアドホック概念」を執筆した。

バイリンガル教育を考える — 日仏バイリンガルの発達と教育の現状 —

研究代表者：

堀内ゆかり（学習院大学外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

中島さおり（学習院大学客員研究員、エッセイスト、翻訳家）

研究の概略：

日本には過剰なくバイリンガル幻想があるように見受けられる。一般的な認識では海外で子供時代を過ごしたり、国際結婚をした両親をもつ子供であれば、日本語も外国語も流暢に話せると思われている。

しかし、言語発達期に複数の言語に触れる機会を持ったからといって、それだけで複数の言語に熟達できるわけではない。バイリンガリズム（第一言語習得時に同時に第二言語を習得すること）は実際にどの程度の効果をもたらしているのだろうか？

本プロジェクトでは、フランス在住の日仏家庭を対象として、バイリンガル教育の現状の検証を試みた。個々のケースについて細部を聞くことのできるインタビュー調査を実施し、のべ22人の親子に話を聞いた。

本プロジェクトの成果の一部は、本号に「フランスにおける継承日本語の実態調査①—家庭における継承を中心に—」として掲載されている。

明末清初における経世致用の学再考

代表研究者：

馬淵 昌也（学習院大学外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

蝦名 良亮（学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師）

中嶋 諒（学習院大学東洋文化研究所P D共同研究員）

林 文孝（立教大学文学部教授）

本間 次彦（明治大学政治経済学部教授）

松野 敏之（国士舘大学文学部専任講師）

プロジェクト遂行の概略

本年度は、都合8回の会合を開き、研究テーマについての認識を深める議論を行った。

当初の計画では、特定のテキストを決めて、輪読する形を考えていた。しかし、プロジェクト発足後の全員での討議の結果、特定のテキストに視野を限るよりも、それぞれの研究領域から、プロジェクトのテーマに関連する主題で、研究発表を行うほうが生産的ではないか、という意見が多かったことから、その形に切り替えた。メンバーの一人一人がそれぞれ現在第一線で活躍中の中堅・若手研究者であったことから、この切り替えは十二分に効果を挙げ、刺激の多い研究発表と討議が継続的に展開できた。成果としては、本号に代表研究者の馬淵昌也が「唐甄における脩己・治人関係の見直しの試み－明末清初経世致用の学の一様相－」を寄稿した。

会合日時及び研究発表担当者・発表題目

2012年6月1日 馬淵昌也「従李贄到唐甄」

2012年6月29日 中嶋諒「宋代事功派の一考察——陳亮の「道」を手がかりに——」

- 2012年8月2日 蝦名良亮「清末民初の明末清初観——梁啓超『清代學術概論』における劉獻廷像について」
- 2012年9月28日 松野敏之「語られるものと語られないもの——永曆政権と西洋（天主教）との関わりを一例として」
- 2012年11月16日 本間次彦「王夫之『春秋』論を読むための予備的考察」
- 2012年12月22日 林文孝「張沐とその顔元批判——「習行經濟」をめぐる対立面」
- 2013年2月23日 金泰昊（学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師・ゲスト報告）「古学と朱子学——近世日本の『大学』評釈から考える儒学思想論」
- 2013年3月22日 馬淵昌也「朱子学・陽明学・考証学の同異の図式的説明プランについて」

2013 年度研究プロジェクト計画

2013 年度に採択された研究プロジェクトは以下の 4 件です。

1. ドイツ中世後期の物語研究—「つまみぐいをする女料理人」「雪の子」
—（代表研究員：加藤 耕義）
2. 効果的なアウトプット活動を行うためのモバイルデバイス活用法研究
（代表研究員：熊井 信弘）
3. バイリンガル教育を考える—今後の外国語教育、継承語教育のために
—（代表研究員：堀内 ゆかり）
4. 中国思想における倫理と功利（代表研究員：馬淵 昌也）

それぞれの研究計画の内容は下記の通りです。

* * *

ドイツ中世後期の物語研究 — 「つまみぐいをする女料理人」「雪の子」 —

研究代表者：

加藤 耕義

研究メンバー：

内堀 敦志（外国語教育研究センター非常勤講師）

草本 晶（麗澤大学准教授）

高瀬 誠（外国語教育研究センター非常勤講師）

平井 敏雄（外国語教育研究センター非常勤講師）

研究の目的：

ルッツ・レーリヒ著『中世後期の物語とその現代文学と現代の民間伝承への影響』（Lutz Röhrich: „Erzählungen des späten Mittelalters und ihr Weiterleben in Literatur und Volksdichtung bis zur Gegenwart“）は、ドイツ語圏に流布する民間説話24話を取り上げ、現存する最古の資料から順に時代を追って提示した貴重な基礎資料集である。多くの説話については、最古の資料として中高ドイツ語の資料が示されている。当研究プロジェクトの目的は、まず、この中高ドイツ語を正確に読み、中世語の文法的な解説を試みることにある。当プロジェクトでは小編2編「つまみぐいをする女料理人」「雪の子」を研究し、発表する予定である。

研究内容・方法：

月に一度程度の研究会を開き、ルッツ・レーリヒ著『中世後期の物語とその現代文学と現代の民間伝承への影響』に収められた上記2話を、翻訳しながら読み進め、難解な箇所には文法解説を加えていく。また、それぞれについて、文学上の注も付けていく予定である。必要な資料は、コンピューターに取り込み、電子資料としても利用可能にする。対訳および注釈の形式をとって研究成果と

して発表する。

効果的なアウトプット活動を行うためのモバイルデバイス活用法研究

研究代表者：

熊井信弘（外国語教育研究センター）

研究メンバー：

Paul Daniels（高知工科大学）

研究の目的：

外国語の授業において、これまでスピーチやプレゼンテーションなどのアウトプットの活動が盛んに行われてきているものの、多くの場合、そうした活動をビデオなどで記録し、その後それを視聴して検討するといういわゆる「振り返り」の活動がほとんど行われず、その場限りのものになってしまうことが多かった。そうならないために、アウトプットの活動をスマートフォンなどのモバイルデバイスで記録し、ネットワーク上で共有することによって、相互視聴や相互評価が可能となるシステムを開発し、実際の授業で試用する。

研究内容・方法：

本研究では iPhone や iPad などのモバイルデバイス上で、動画の録画・再生が可能となるアプリケーションとモジュールを開発するが、これによってスピーチやプレゼンテーションなどの様子を教員や学習者がモバイルデバイスで録画し、それを Moodle サーバーの授業活動ページに直接アップロードすることによって、録画した動画をウェブ上で共有・閲覧することができるようにする。このシステムによって授業で撮影したアウトプット活動の動画を即座にセキュアかつプライベートなサイトでのみ公開することができるだけでなく、手

もとのモバイルデバイスなどで視聴することによって、その場で自己評価や相互評価が可能となり、より客観的な視点から活動を評価することができるようになる。さらに、様々な観点からなる評価項目が記録できる Rubrics(評価基準)の機能をこのシステムに付け加えることによって、教員から学習者へのフィードバックをより具体的でわかりやすいものにできる。授業ではアウトプット活動を行い、このシステムを用いてそれらの動画を記録し、相互視聴および評価活動を通してアウトプット活動がより効果的に行えるかどうかを検証する。

バイリンガル教育を考える —今後の外国語教育、継承語教育のために—

研究代表者：

堀内ゆかり（学習院大学外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

中島さおり（学習院大学客員研究員、エッセイスト、翻訳家）

研究の目的：

2012年度のプロジェクトでおこなった、日本における〈バイリンガル幻想〉の検証、フランスの日仏バイリンガル教育の現状の検証をふまえ、2013年度の研究プロジェクトにおいては、日仏の外国語教育の現状を検証し、具体的な提案により、今後の外国語教育、継承語教育に役立てたい。

研究内容・方法：

在仏日本人（配偶者が日本人、フランス人、第三人の場合を含む）が、子弟への日本語継承のために利用している日本語教育機関（日本語補習授業校、フランス国民教育省下にある学校の日本語セクション、外国語としての日本語

授業、私立の日本語学校など）の教員にインタビューし、生徒の傾向と教育上の問題点を探る。また、それらの学校の教育内容を外から規定している、フランスの外国語政策、外国語カリキュラムについて概観する。

中国思想における倫理と功利

研究代表者：

馬淵 昌也（学習院大学外国語教育研究センター教授）

研究メンバー：

蝦名 良亮（学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師）

金 泰昊（学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師）

中嶋 諒（学習院大学学長付国際研究交流オフィス PD 共同研究員）

松野 敏之（国士舘大学文学部専任講師）

林 文孝（立教大学文学部教授）

本間 次彦（明治大学政治経済学部教授）

研究の目的：

周知の如く、中国伝統思想においては、古くより、功利と倫理（道徳）の問題が不断に議論されてきた。しかし、この問題について、特定の時期に興起した特定の思想家や学派が分析を受けることはあったが、より広い視点から考察されることは少なかった。溝口雄三による、明代後期以降清代にかけての天理・人欲関係の通時的变化の抽出などは、そうした数少ない業績のひとつであるといえる。今回の研究プロジェクトでは、従来の研究の到達点を再確認し、この「古くて新しい」問題に対していかなる新たなアプローチが可能かを模索することとしたい。

研究内容・方法：

研究の内容は、中国思想における「功利」と「倫理」の関係問題についての従来の研究を回顧し、その議論の射程を確認するとともに、メンバー各自の問題意識に従って個別に研究を進め、各人が当該問題についてそれぞれに新たな地平を切り開くことを目指す。方法としては、ほぼ月に一回のペースで定期的に会合を開き、まず書籍・論文の合評会や研究発表を行い、その後フリーディスカッションを行う。メンバーは宋明期中国思想、及び江戸時代日本思想の専門家であるので、その領域を中心とした議論の展開になることが予想される。